コミュニティラジオをグローカルに開く

～アメリカ，イリノイ州，WRFU-LP の日本語番組の試み

西　川　麦　子

は　じ　め　に

WRFU-LP 104.5 FM は，アメリカ合衆国，イリノイ州，アーバナ市内にあるコミュニティラジオである。Urbana-Champaign Independent Media Center（非営利団体，以下，UCIMC と記す）というコミュニティメディア＆アート・センターのプロジェクトの１つとして活動している。100ワットの低出力（Low Power: LP）FM 局であり，ボランティアによって運営されている。北米では，1960年代以降，公民権運動などの社会運動のなかで，「パブリック・アクセス」（市民が制作する権利をもつ放送）の議論が行われ，制度が確立し，メディアへの住民参加が進んだ（津田 2011：70）。WRFU もまた，少額の年会費を支払い基本的な講習を受けると，誰でもラジオ番組制作に関わることができる，住民参加に重点をおいたコミュニティラジオである。

筆者は，2010年９月からイリノイ大学の Urbana-Champaign 校に１年間在籍し[1]，住まいの近くにあった UCIMC の活動に関わり，2011年４月より WRFU において日本語でのラジオ番組の制作，放送を始めた。Urbana-Champaign は，大学を中心とした街であり，海外を含むさまざまな地域の出身者が集まる。日本語放送の開始が，現地のコミュニティ FM においてより多くの言語による放送が始まるきっかけになればと考えた。毎週金曜日夕方６時から１時間，ラジオ局のスタジオと日本とをインターネットを利用してつなぎ，トークと音楽を生放送で届けている。

この論文では，アメリカの Independent Media Center のネットワーク，Indymedia（後述）に連なる UCIMC や，そこでのコミュニティラジオの活動を紹介しながら，在米外国人である「私」の視点から，WRFU で日本語番組を始めるまでの経緯と，何を困難と感じどう対応してきたのかを記述していく。番組開始までのプロセスに焦点をあてるのは，そこで見いだされる言語，コミュニケーション，コミュニティの問題は，WRFU に限らず，他の地方や日本でも，地域に基盤をおくメディアをより多くの人々が利用しようとする場合に，共通点もあるのではないかと考えるからだ[2]。

しかし，それらの問題は，超え難い障壁というよりも，視点を変えればコミュニティメディアをさまざまな立場の人々に開く可能性を含んでいる。地域にネットワークをもたない住民であっても，そのメディアの特性を活かしながら，場所と人とをつなぎ，多言語・多文化の交流の場を生み出すことができる。この点を，WRFU の日本語放送を１つの事例として論じていきたい。

1　UCIMC と WRFU ～地域に基盤をもつメディア＆アート活動

1-1 UCIMC～市民によるメディア＆アート・センター

City of Urbana（アーバナ市，2010年現在人口41,250人）[3] と City of Champaign（シャンペーン市，同年人口，81,055人）は，アメリカ合衆国中西部イリノイ州の Champaign County（同年人口，201,081人）[4] の中心部にあり，東西に接している。イリノイ大学 Urbana-Champaign 校のキャンパスは，両市にまたがっている。本稿で U-C と記載するときには，この２市をさす。

大学街である U-C には，さまざまな地域の出身者，言語を話す人々が暮らしている。とくにアジア系人口は多く，U. S. Census Bureau 2010年統計では，Urbana 人口の16.3%，Champaign 人口の10.6%を占める。これはヒスパニック系とラテンアメリカ系人口（Urbana 5.2%，Champaign 6.3%）よりも高い数値である。また，イリノイ大学の2011年秋学期学生在籍者数42,605人のうち，19%が International Student である。世界115カ国から留学生8057人が登録し，このうちアジア諸国からの学生が83.3%を占める[5]。

UCIMC は，Urbana の中心部にあるメディア＆アー

写真１　UCIMC 正面　2011年
（写真は全て筆者撮影）

ト・センターである（写真１）。同ホームページによると，UCIMC は，「Urbana-Champaign における社会的，経済的正義を推進していく手段としてメディアを利用し普及させる草の根の組織［501（c）3］である」。2009年時点で，UCIMC の加盟団体は65，1200名以上がボランティアとして活動している。書類に連絡先等を記し年会費50ドルを支払うと，UCIMC のメンバーとして登録される。メンバーではなくても，UCIMC の建物で行われるイベントや諸活動に参加することはできる。UCIMC の利用者には，学生や教職員など大学関係者も多い。

UCIMC には多数の団体が加盟しているが，その全体を運営する諸部門（有償とボランティアからなる）[6] と UCIMC のもとにいくつかのワーキンググループやプロジェクトがある。コミュニティラジオ，WRFU-LP 104.5 FM，通称 Radio Free Urbana もその１つである。Public-i は，UCIMC 設立当時から新聞を発刊，年間10回，総数4000部発行し（Stengrim 2005），U-C の商店やキャンパスに無料で配布している。Books to Prisoners（イリノイ州刑務所へ本を送る運動）や，Maker Space Urbana（コンピューターなどの技術相談，電気部品，機材のクリエイティブな再利用），地域の出版物や Zine（小冊子，ミニコミ誌，フリーペーパーなど）を集めたライブラリー，アーティストの活動支援，スタジオ運営，演劇，音楽，イベント企画，などである。この他には，同建物内には UCIMC 加盟組織である Bike Project, Community Center for the Art（C4A），CUWIN Community Wireless Network, School for Designing a Society, UP Center for Champaign County が場所を借りて活動を展開している。

この UCIMC のモデルとなるのは，1999年にシアトルでの世界貿易機関（WTO）閣僚会議開催中に，オルタナティブな報道機関として設立された Independent Media Center[7] である。この時は，新自由主義的政策への疑問やシアトル市内での抗議デモの様子などがインターネットやラジオ放送などをとおして配信された。シアトルの IMC モデルは全世界に波及し，全米内や海外において設立された IMC が Website を開設してつながり，Indymedia ネットワークを形成し，多様な政治的な立場の情報や意見を集積，発信している（ウォルツ 2008：231-235）。

Urbana-Champaign から1999年のシアトルでの抗議運動に参加した人々や IMC の活動を支持する人々が集まり，翌年2000年には，UCIMC が設立され，U-C にある複数の団体がこれに加盟した（Johnson 2009）。2001年１月には，UCIMC は，Urbana の Main Street に場所を借りて活動拠点とした。2005年５月には，Urbana のダウンタウン中心部にある郵便局本部が郊外に移転したあとの建物を，市民からの寄付を募り UCIMC が購入した。その後も，この歴史的建造物の一部を郵便局の支局に貸している。他の部分は，１階には，コンサート，展示，会議などを行うことができる２つのホール（250人以上の収容可能），コミュニティラジオ局がある。地下１階には UCIMC のワーキンググループなどが小部屋を利用し活動を行っている。２階の部屋は，諸団体に有料でオフィスとして貸し出している（Melchi 2005, Illyes 2005, McCann 2010）。

以上のように，UCIMC は住民が多目的に利用できるスペースを確保し多数の団体とメンバーを抱えて地域に根づいた組織であり，同時に Indymedia ネットワークと連携し（図１），全米および世界の IMC とのつながりをもつ[8]。2005年に拠点となる建物を得たときに，UCIMC の関係者が準備してきたコミュニティラジオ，Urbana Free Radio が開局された。

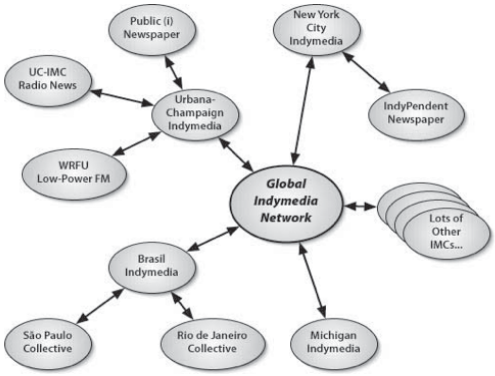

図１　Indymedia Network, UCIMC の Website 内 Global Indimedia より引用

写真２　UCIMC 北面　中央建物上送信アンテナ　2011年

写真３　WRFU スタジオ　2011年

1-2 Radio Free Urbana～手作りのコミュニティラジオ局

アメリカでは，連邦通信委員会（FCC：Federal Communication Commission）の低出力 FM 局の免許発行手続などの公的な許認可手続を行うことで，低出力 FM 局は最大100ワットまでの放送が認められている（ウォルツ 2008：77）。WRFU は，最初は，Socialist Forum of Champaign County が申請をして，2003年に放送許可を得た。その後，Socialist Forum が UCIMC と合意して，WRFU が UCIMC のプロジェクトの１つとなり，コミュニティラジオとして広く住民に開かれることになった。2005年に UCIMC が元郵便局建物に移転した後，Prometheus Radio Project[10] の支援を受けて，会員や地域内外のボランティアとともに，ラジオ・スタジオを作り，65フィートの送信アンテナ[11]を建てた（写真２，３）。こうして，2005年11月13日に，WRFU 104.5 FM からの最初のラジオ放送が行われた[12]。

商業ラジオ局の多くが10,000ワットの出力をもつのにたいして，WRFU は100ワットにすぎない。電波が届く範囲は半径５マイルほど，Urbana と Champaign 市内に限られている（Melchi 2005）。また，建物などの障害物や土地の起伏によっては２市のなかでも電波が届きにくい。Champaign 市内には，NPO のコミュニティラジオ，WEFT 90.1 FM が，1981年にすでに開局している。NPO のコミュニティラジオであるが，現在では，10,000ワットの出力で東イリノイ州の広域に放送を届けている。U-C で聴くことができる多数のラジオ放送[13] のなかにあって，WRFUが一般住民に広く認識されたラジオ局であるとは言い難い。しかし，WRFU の特徴は，どのような住民でも，わずかな費用で番組制作に関わり得ることである。１週間の全曜日，毎日24時間オンエアーの局でありながら，専従スタッフはいない。設備投資，人件費，運営費などの経費を最小限に抑えている。住民は，UCIMC の年会費50ドルと WRFU の年会費25ドルを支払えば，１週間に２本まで番組を担当することができる。これらの会費も，経済的な理由があれば免除される。また，局や番組の商業的なスポンサーはついていない。

実際に番組を始めるためには，host（番組の代表者）１名と co-host（副代表者）１名の届け出が必要である。WRFU の会議（毎月第１火曜日と第３土曜日）での承認を得て，番組のスケジュールを調整し決定する。WRFU のラジオ放送に関する講習会は，メンバーがボランティアで行うが，その内容は，WRFU 104.5 FM が作成した13頁にわたる『Airshifter Hand Book』[14] に沿ったものである。UCIMC と WRFU の趣旨，連邦通信委員会の認可制度，ガイドライン，放送倫理の他に，竜巻発生など有事に際する臨時放送について，スタジオ内での機材の使い方，毎回の放送で言及すべきこと，番組の記録方法，などである。

Urbana のスタジオで制作されている番組は，2011年12月現在では21，他のコミュニティ FM などで制作され WRFU から放送している番組が27である。WRFU 独自の番組の内容は，移民問題，アメリカ先住民，オーガニックフード，多様なジャンルの音楽番組，宗教関連，子供の本の読み聞かせ，時事的な社会問題，などである。UCIMC の，他のプロジェクトのメンバーが WRFU のラジオ番組を担当している場合もある。たとえば，パソコンなどの技術サポートの活動，バイク（自転車）ライダーの番組，などである。印刷，電波，イベント開催など，異なるメディアを組み合わせて活動を展開しうることも，メディア＆アート・センターとしての活動の特徴である。

1-3 UCIMC への加入～誰でもがメディアになれる？

UCIMC との関わりは，私が渡米する前に計画したものではない。これから述べていくように，たまたま住まいの近くに UCIMC があったという偶然による。

まさかラジオ番組を担当することになるなど，日本では想像したこともなかった。しかし，UCIMC や WRFU への関心は，結果的には，私のこれまでの調査研究のテーマと重なっていく。

私は，2001年から，ロンドンの地域社会を対象に，さまざまな人々が集まり移動する都市空間において，人々がそこで暮らす場所に根ざした地域コミュニティづくりの可能性についての調査を行ってきた（西川 2004，2007，2009）。在米中のイリノイ大学での研究課題は，「1960年代のコミュニティ活動と草の根運動のトランスナショナルな思潮」と題し，60年代当時のアメリカとイギリスの地域づくりや対抗文化を志向した活動が，どのように関係，連鎖していたのかを調べる，といった内容である。

WRFU における日本語のラジオ番組制作は，ロンドンでの1960年代のコミュニティづくりの活動家たちへの取材をとおして学んできたことから影響を受けている。つまり，「マスメディア，オルタナティブ・メディアを含む多様なメディアを活用し，“コミュニティ”や場所をベースにしつつも，地域内外の人と人，情報をつなぐ可能性」を，私自身がメディアと関わりながら考えていくことになる。

また，研究方法としては，私が日本，バングラデシュ，ロンドンで行ってきたフィールドワークとは，とくに発信のプロセスが異なる試みでもある。これまでの調査では，現場との関わりを記録し，調査資料を整理した後に，それらを論文などにまとめて第三者に発信する，という段階をふんだ（西川 2010）。しかし，UCIMC への参加，WRFU での活動は，番組制作というかたちで人と人，情報が交わるメディア・スペースをつくり，そこから電波を用いて第三者に発信しながら人と場所とに関わり，その音声と文字での記録をウェブサイトに随時に公開し，アーカイブに情報を蓄積していく，というアプローチとなった。

2010年９月中旬，Urbana のダウンタウンにあるアパートに入居した翌日，街のなかを散策してみた。有機食品など健康志向の食材店，パン屋，アート，服飾，靴，楽器，文具，古本，美容院，レストラン，スポーツジムなどいずれも小規模な店舗，施設がある。アメリカの郊外の大型ショッピングモールとは様相を異にする。市街中心部には，比較的裕福な白人住民や，学生が多く，その一方で，バスの停留所では，より広い経済的階層，出身の人々を見かける。街の中央の大きな古い建物が目に入った。IMC とデザインされた独特な文字が大きく掲示されてはいるが（写真１），詳細な説明はない。何に使われているのか。建物をしばらく眺めていた。老若男女，白人も黒人も多様な人々が出入りしている。福祉関係の施設だろうか。扉をあけて中に入ってみた。

写真４　UCIMC 内部１階　入口オフィス付近
パソコン室等　2011年

写真５　UICIMC 内部１階　ミィーティングスペース
2011年

中央入口右手が郵便局，扉の奥に，もう１つ別の扉があり，開けるとその内側は，想像以上に広いスペースだった。入口の小さな受付デスクに座っていた女性に尋ねた。「ここは，コミュニティセンターですか。今日初めて来たのですが」。クリスティーナ（Kristina）と名乗るその女性[15]は，ここが Independent Media Center であり，「いろいろなアート活動，芝居，ラジオ，ニューズレターの発行，刑務所の入所者へ本を送る運動などをしていたり，図書室もあります」と説明し，建物内を案内してくれた。（写真４，５）

歴史的な建物と POP アートなデコレーション，古いピアノ，ライブができそうな小さなステージ，音を調整するミキサー，より広い展示スペース，そして，本棚やパソコンが並んだ書斎空間，社会運動や左翼系の本，寄せ集めのように１つ１つ形が違う椅子やソファ

やテーブルがおかれたくつろぎ空間，ポップコーン機もある。地下１階は，壁全面の棚に多数の本が詰め込まれた部屋，色鮮やかな衣装や靴が並ぶ衣装室，中古の自転車が多数ある作業場，雑多な電機部品がつまった部屋，いろいろな色が塗られた椅子が無造作においてあるミーティングルームなどがある。廊下の壁にはキャンバスに描かれた抽象画がいくつもかけてあり，通路の床にも多様な文様がほどこされ，見ているだけで楽しかった。クリスティーナは，関心があればいつでも連絡してください，と彼女のメールアドレスをパンフレットに書き添えてくれた。

2010年10月１日に，UCIMC を再訪した。事前にクリスティーナにメールを送り，会う約束をした。この日は，ホールでは古本市が開催されていた。こうしたイベントや地域の情報をえることができればと思い，UCIMC に加入し，いくつかのワーキンググループの定例集会を見学することにした。UCIMC で開かれるミーティングは，基本的には，関心がある人は，誰でも出席することができる。

ラジオ番組の担当者が集まる会議にクリスティーナが参加するというので，10月７日，WRFU のミーティングへいってみた。日本でラジオ番組に関わった経験はないが，私が勤務する大学の教員から，コミュニティラジオの設立や運営についての話を聴いたことがあった。おかげで，WRFU により高い送信アンテナを建設するための認可取得，資金集めの難しさなど，議論の内容を少しでも想像することができた。会議が終わると，参加者たちが，「あなたもラジオ番組を担当してみたらどうですか」と声をかけてくれた。しかし，「ラジオ番組を担当するなんて，考えられない」と尻込みする私に，彼らは前向きに話した。「そんなことないよ，やればできるよ」。「僕だって数年前まで，ラジオのことなど全く分からなかった」。ついでなので尋ねてみた。「日本語の番組でもいいの？」，「もちろん」。

他にもいくつかのプロジェクトを見学し，興味をもった活動のメーリングリストに登録した。UCIMC では，多数の会員間のコミュニケーションは，E メールでのやりとりが中心となる。UCIMC の会員登録が完了したことを知らせるメールには，活動方針とワーキンググループなどへの案内の文章が添えられていた。IMC は，「人々が技術や情報にアクセスできることによって“メディアとなる”ことを支援していく。真実を追求し，伝え，主張していくことができる，そんな草の根のネットワークである」，といった内容の書きだしだった。イタリック体で強調されている *become the media* という英語に，目がとまった[16]。Indymedia 運動のスローガンとして体制やマスメディアに対抗するための言葉であろう[17]。それにしても，暮らしのなかで人々が「メディアになる」とはいったいどういうことだろう。より多くの人々が，誰でもがメディアを使って表現し発信できる，という意味だろうか。とりあえずは，UCIMC に関わってみることにした。

2　コミュニケーションとコミュニティの壁 —グローカルなラジオ番組をめざして

2-1 在米日本人にとっての言語，技術，コミュニティの問題

2010年10月初旬，WRFU のメーリングリストにも登録すると，自己紹介を送るようにという返信が届いた。次のような内容のメールを書き送った。

「９月より１年間，イリノイ大学の EALC（Department of East Asian Language and Culture）に研究員として在籍予定である。住まいが UCIMC から徒歩８分，偶然，建物に立ち寄り，ここが Independent Media Center であることを知った。Community Media とは何だろう。いったい何から独立しているのか。どんなふうに人々に開かれているのか，と関心をもった。WRFU の集会に参加してみると，日本でコミュニティラジオに関心がある知人が話していたのと同じような問題が議論されていた。WRFU の指針や番組の作り方を学ぶことができれば，日本の学生や関心がある人に伝えることができるかもしれない，と考えている」。

このメールを送信した１時間後には，WRFU のメンバーから返信が届いた。２つの催しの案内が記されていた。１つは，その週の木曜日夜８時から開かれるラジオ番組の新規担当者への講習会，もう１つは，その２日後の土曜日に UCIMC への寄付を募るイベントがあり，組織全体や各プロジェクトの活動を紹介するという。興味があれば，見学してみたらどうか，といった内容だった。新規メンバーにたいして，その関心に応じた情報を瞬時に送り届ける，その対応の早さと的確さに驚いた。

こうして私は，WRFU のメンバーたちの親切なはからいで，渡米して１ヶ月もたたないうちに WRFU の講座に出席していた。私以外の３人の受講生たちは矢継ぎ早に，こんな質問をしていた。「シカゴでラジオ番組をもちたいと思ったが，費用が高くて希望がかなわなかった。このコミュニティラジオでは，本当に，

この会費で，音楽番組を始めることができるのか」。私は，英語のやりとりを充分には理解できなかったが，「誰でも番組を担当できる」ラジオであることに，さらに興味がわき，その後も WRFU の定期集会やイベントに参加するようになった。

WRFU では，担当者の国籍や，番組で使用する言語を問わない。多言語・多文化を扱う放送が可能ではあるが，しかし実際には，2010年当時，WRFU には英語とスペイン語の放送のみがあった。イリノイ大学のキャンパスではアジア系の学生を多く見かけるが，UCIMC の利用者は少ない。UCIMC では，より多くの人々に開かれた活動を展開しているが，立場によっては，利用しにくい場合もある。私は，WRFU に関心をもち，可能であればラジオ番組作りに携わってみたいと思いつつも，集会に参加するたびに，現実的にはそれは困難だと感じていた。

第１には，言語能力の問題である。ラジオをよく聞く人でも，話し方のトレーニングや実践的な番組制作講座を受けるなど何らかのきっかけがなければ，ラジオ番組を担当しようとは考えにくい。ましてや，英語が不自由であればなおさらである。私の場合は，集団での英語の議論になると，内容を充分に把握できない。何が理解できないのかが即座に判断できず，質問をして確認することができない。UCIMC で開かれる集会に出席しても，議論を目で追っている状態である。日常の情報収集さえままならないのに，番組を制作し，公共の電波をつかって放送することができるだろうか。ラジオは音「声」によって伝えるメディアである。

第２は，ラジオ番組制作の技術面についてである。スタジオにある機材の基本的な操作は，講習を受け数回，経験すればなんとか習得できる。しかし，スタジオ内の中古の機材や WRFU 内のパソコンには，さまざまな故障が生じる。現場で対応できない問題は，UCIMC の技術関係のワーキンググループへ応援を求め，WRFU のメーリングリストをとおしてメンバーに対応策を尋ねる。そこで必要となるのは，技能だけでなく，臨機応変に状況に対応し連携していく（英語による）コミュニケーション能力であり，それは私にはとても望めない。

第３に，コミュニティラジオにおいて，コミュニティとは何か，という問題である。Low Power FM においては，電波が届く範囲は地理的には限られている。その地域に何らかの関わりがある人が作り手となり，リスナーとなることによって，地域住民にとって身近な番組制作が可能となる。U-C の住民の多数が英語使用者であるが，メキシコなどスペイン語圏出身者やその２世，３世も多い。WRFU の番組のなかには，アメリカでの移民が直面する多様な社会問題や差別を“コミュニティ”の問題として扱うスペイン語放送もある。しかし，U-C において，日本人や日系人は少なく，日常生活における関係や，意識のうえでも，日本人コミュニティがあるとは言い難い。仮に日本語番組を始めたとしても，誰に向けて何を発信するのか。地域に密着したコミュニティラジオにおいて，受け皿となるコミュニティがない番組など，ありえないのではないか。

言語能力，技術とコミュニケーション能力，そして地域やコミュニティとの関係，いずれの点からみても，私が番組作りに関わることは難しい。そう考える一方で，それでは，このコミュニティラジオは，誰のためにあるのか，WRFU がさす“コミュニティ”とは何だろう，という疑問が残った。UCIMC は，数の多少や力の大小にかかわらず，一人一人が，言葉を発すること，声なき声を表現することで，社会と関わり問いかけることをめざしている。そして Indymedia とは，さまざまな立場の人々が，メディアを作り出し，活用し，発信し，つながっていく運動でありネットワークであるはずだ。

大学街である U-C には，多様な言語，社会的・文化的背景をもつ人々が暮らしている。留学生を含め，学生たちは，大学を卒業すると U-C を離れていく流動的な人口であっても，地域の住民である。コミュニティラジオや UCIMC の活動に，もっと多くの言語が飛び交い，多様な文化，立場の活動や放送があってもよい。そんなことを考えながら，アメリカに来てから購入した小型ラジオで，WRFU の放送を聞いていた。

トピックスはさまざまだが，ラジオから聞こえてくるのは，プロのアナウンサーの話し方とは異なり，美しい声でも，正しい話し方でもない，普通の人たちのおしゃべりである。声の不調も，時にはあくびの気配まで届いてしまう。電車のなかで聞こえてくる他の乗客の会話のようなトークがラジオから流れてきても，意外と不快ではない。話者が無理せずに楽しそうに話すリズムは，リスナーにとっては，聞き心地がよい。歩きながら，料理をしながら，聞き流すこともできる。ラジオは，暮らしの風景に入り込みやすいメディアだと感じた。

WRFU では，近隣住民が番組を担当し，地域で起きている問題や生活に役立つ情報，身近に取材した内容を伝えるが，地域性を重視した番組ばかりではない。

また，WRFU のメンバーに，「リスナーはどういう層？」，「誰がこの番組を聴いているの？」と尋ねても，「そんなこと考えたことがなかった」，「確かめようがない」という答えが返ってくる。リスナーが誰か，どのような層をターゲットとするのかを優先的に考えて番組をつくるというよりも，伝えたいから話す，話すから伝わる。そこから，何かが展開し，つながりが生まれる。まずは「発信者ありき」の取り組み方は，私には，新鮮な驚きであった。

WRFU の番組を聴きながら，ラジオ番組にたいする考え方が少しずつ変わっていった。流暢に標準語を話すことができなくても，普段の言葉で話してもよいのであれば，私でも，また話す言葉が日本語でも，ラジオをとおして発信することができるかもしれない。日本人のリスナーは，多くはない。しかし，イリノイ大学の日本語クラスの受講生だけでも，毎年200人ほどいる。イリノイ大学の Japan House では，日本の伝統的文化を伝える活動が長年，展開されている。日本のサブカルチャーに関心を寄せる学生たちのクラブも複数ある。日本に関心をもつ日系アメリカ人や，自身か家族が英語教師として，あるいは一般企業や軍関係に勤務し，日本に長期滞在した経験をもつ人もいる。日本語放送を，日本語を介したコミュニケーションだと考えれば，潜在的リスナーは存在する。

2-2 Harukana Show～コミュニティラジオをとおして米日をつなぐ

Urbana-Champaign に多くの知人も情報のネットワークもない，在米外国人の私が，コミュニティラジオを使って何ができるか。2011年１月，こんなアイディアのラジオ番組を考えはじめた。限られた地域にしか電波が届かないコミュニティラジオと，グローバルに人と情報をつなぐインターネットを組み合わせ，日本語と英語をもちいて，いろいろな人が参入できるスペースをつくってみたい。地域内外の日本を含む異なる場所をインターネット電話，スカイプでつなぎ，多様な文化や社会や立場の人々と話をする。そこでの対話，情報をラジオで放送し，その録音を編集してウェブサイトに音声をアップロードしていく。そんなトーク・ショーができないだろうか。

番組は，「Harukana Show（ハルカなショー）」と名づけた。協力者を募るための企画書には，こう記した。「ハルカとは，“春香”と“遙か”の掛詞である。寒さが厳しいイリノイの冬の向こうの春が待ち遠しく，日本の暮らしの季節感や表現が懐かしく，いろいろな場所，人生に暮らす人々の季節の感性と言葉と記憶を，ラジオをとおして伝えたい。番組開始は４月と考えているので，春香という言葉を考えた。ラジオやインターネットをとおして，身近な場所での情報交換と，アメリカと日本という地球の遙か離れ場所をつなぐ試みでもある。また，ベンガル語でハルカとは，軽いと言う意味だ。いろいろな境界を軽やかにこえながら，メディアをとおして人と情報が集まるスペースづくりから始めてみたいと思う」。

ハルカ（春香／遙か）なショーは，Harukana Show とアルファベットで記載すると，意味不明な音となる。そのほうが，タイトルが番組の内容を制約せず，制作担当者が変わっても番組が継続しやすい。番組の内容については，企画書には，「日本（語）の音楽，音，詩。UCIMC の活動や，自分を面白がりながら人とゆるやかにつながる活動についての紹介。Urbana-Champaign や日本からの声のゲストとのトーク，若い人たちが関心をもつ“日本”など」，と簡単に記している。

2011年３月３日の WRFU の月例集会で，日本語番組を４月から開始したいと伝え，こんなふうに説明した。「WRFU のスタジオと日本とをインターネットでつないだトークを生放送する，ローカルでインターナショナルな日本語番組を考えています。アメリカと日本の日常の暮らしや音楽を紹介しようと思います」。会議の参加者からは，「クール！」と反応はあったものの，日米をつないだトーク番組が成立するのか。誰も確信はなかったが，番組を始める承認をえた。まずは，スタジオの様子と番組づくりの現場を知るため，WRFU のいくつかのラジオ番組を，放送中に見学させてもらうことにした。

2-3 東日本大震災報道～暮らしに身近なメディアと多言語放送

WRFU のラジオ局に通い，番組を見学し始めた頃，2011年３月11日，東日本大震災が発生した。NHK ニュースが Ustream をとおして24時間配信されるようになると，パソコンの画面から，日夜，目を離すことができなかった。気分が悪くなり，３日間，外出していないことに気づいた。その間，日本とメールやスカイプで連絡をとることはあっても，U-C で，日本語で会話することもメールで交信することもなかった。異国の地で日常生活において，人との付き合いがいかに少ないかを改めて認識した。

イリノイ大学では，日本の震災，原子力発電所事故

などに関するシンポジウムが開催された。日本関係の組織や日本文化に関するサークルが義援金を集めるイベントや活動を行っていた。日本へ留学生を送り出しているプログラムの担当者は，対応に追われていた。想像を絶する災害が生じているときに，日本関連のトーク＆音楽番組を始める時機ではない。いったんは計画を中止しようと考えた。

その一方で，災害の報道をみながら，U-C で災害が発生したら自分はどうなるだろうと考えた。以前，Urbana の街にサイレンが鳴り響いたときに，たまたま WRFU のラジオ番組を聴いていた。緊急の放送が流れ，外から聞こえたのが竜巻の警報であることを知った。しかし，その次にどうしてよいのか分からなかった。日本で，外国人や日本語をじゅうぶんに解さない，そこに多くの知り合いがいない人々は，被災地で，あるいは災害報道を受けて，どうしているのだろう。

2011年３月24日に，WRFU の新しい送信アンテナ建設申請にたいする公聴会が，Urbana のタウンホールで開かれた。WRFU 関係者は，コミュニティラジオが，地域住民にいかに活用され，英語だけではなく，スペイン語の放送もあることが強調された。だが，災害，緊急時にコミュニティラジオを有効に活用しうるという発想は，説明にはなかった。日本からの東日本大震災報道では，日常の暮らしのなかに多様なメディアとネットワークがあることが，緊急時においても重要なはたらきをすることを伝えていた。被災地では臨時災害ラジオ局が開設されていた。日本において緊急事態の今だからこそ，U-C の平時において，日本語放送の番組を始めることが，コミュニティラジオと地域内外との関わり方について考えるきっかけにもなるのではないか。

また，大きな災害後の長期にわたる復興のプロセスは，海外のメディアでは報道されることは少なくなるだろう。アメリカのコミュニティラジオであっても，日本からの出演者の言葉には，震災に限らず，その時々の社会の状況や暮らしの様子が表現される。日本在住者の生の声を，ゆっくり長く，ラジオをとおして U-C に届けていきたい。迷いはあったが，当初の予定とおり４月から番組を始めることにした。

3　実践をとおして学ぶラジオ番組

3-1 現場から学ぶ番組制作

WRFU の１回の講習会では，ラジオ番組を担当するにあたっての心構えとスタジオにある機材の操作を学ぶことはできる。しかし，どうやって番組を作るのか，ラジオ番組制作の「基本形」が提示されることはない。常識としてのルールや守るべき倫理はあっても，番組内容や制作方法については各グループの意向に任せる。これは，個々人の立場を尊重する Independent Media としての UCIMC の方針であろう。主体性，独自性の尊重は，しかし，その社会の常識や良識に不慣れな者にとっては，時には，高い敷居となる。どこからどうやって始めてよいのか，何がどこまで許されているのか，実施可能なのか，見当がつかない。

そんな私にとっては，スタジオ見学は，番組制作について学ぶ貴重な機会となった。WRFU というラジオ局のさまざまな「実情」も見えてきた。ラジオ局は，正面は防音の２重のガラス張りになっていて，外からもスタジオ内を見ることや，中から通行人を眺めることができる。スタジオにはデスクトップのパソコンが１台，マイクは３本，CD プレーヤーとカセットデッキが各一台，音声の調整や入力接続を切り替えるミキサーが一台ある。スタジオからの音声と送信アンテナとをつなぎ，出力を調整するトランスミッターや，毎回の放送を録音するコンピューターは，UCIMC の建物内の他の場所に設置されている。スタジオの１面には手作りの棚がそなえつけられ，音楽 CD が納められている。

WRFU では，さまざまな人々が，仕事や学業や家事や育児の合間の限られた時間を利用して番組を制作している。担当者は，番組開始15分前，場合によっては，10分，５分前にスタジオに駆け込んでくる。誰もが忙しそうだが，スタジオ内は，むしろくつろいだ雰囲気である。ラジオで音楽を流しマイクをオフにしている間に，狭いスタジオのソファーに座っている私に，いろいろアドバイスをしてくれる。

「スタジオで話しているときは，自分一人だと感じるかもしれない。でも，ラジオは，その先に見えないけれど，リスナーがいる。時には，疲れていて，気分が落ち込んでいることもあるけれど，声を沈めたらいけない。相手がいると思って，気持ちを少しハイにする」。

「何10分も話し続けたら，リスナーは飽きてしまう。長くて15分。話を聴いてもらおうと思ったら，あいだに音楽を入れて番組にめりはりをつけるといいよ」。

スタジオ見学をとおして感じたのは，「ラジオは楽しい」と出演者が自然に表現していることだ。スタジオには，生放送の「盛り上がり」がある。スタジオ内での出演者が一人でも，マイクを通したその声が誰か

に届いていると考えるとき，緊張とともに高揚する。複数でも一人でも，出演者は，身振りも含め体全体で表現している。深刻な話題であっても，前向きな表情になる。音楽番組では，曲を流している間に，思わず，椅子から立ち上がり，スタジオで踊ってしまう場面もある。

ある１時間番組の見学をお願いしたときには，こんな誘いの言葉が返ってきた。「いいですよ。でも，番組に参加してね。英語ができなくても気にしなくていいよ。いろいろ質問するかもしれないけれど，これから始める日本語のラジオ番組についてでもいいし，話してみて。ラジオでのトークに慣れるいい練習になるよ」。スタジオに入ると，ヘッドフォンを渡され，マイクの前に座った。数分の自己紹介のつもりが，番組が終わるまでトークに参加することになった。生放送なので，逃げ出すことができない。英語が分からなくなると，ホスト役が話の流れを補足して説明してくれた。ゲストの話の流れを支えながら，間をあけずに言葉をはさみ，会話をつなげる。ゲストとして出演することで，ホストの役割についても学ぶことができた。実践が，どれほど貴重な学習法であるかは，経験すると痛いほどよく分かる。

3-2 緩やかな時間感覚，状況への柔軟な対応

スタジオを見学して驚いたのは，「時間」感覚が緩やかなことである。各グループは，毎週，30分から１，２時間の番組を数人で担当する。打ち合わせをする時間も限られ，本番では，一人が何役もこなす。資料をみながら，音楽をかけながら，話をしながら，音声を調整しながら，時間を管理する。ディレクターやエンジニアやパーソナリティやタイムキーパー，といった分業はなかなか成立しない。ゲストの話の腰を折らないように気づかい，あるいはトークが盛り上がって，「つい」，番組終了時間が伸びてしまうことがある。

WRFU の放送は，予定番組がない時間帯は，すでに録音している地元アーティストによる音楽が自動的に流れる仕組みになっている。番組と番組のあいだは，なるべく30分以上の時間をあけているので，万が一，番組の開始や終了が，予定より前後した場合も，他の番組への影響は少ない。また，WRFU では，商業的なコマーシャルは流していない。年会費以外に，時間を単位として放送利用料を支払っているわけではない。時間が，「お金」によって厳しく拘束されてはいない。

ラジオ番組を，分，秒単位で構成し準備を整えていても，思うようにはいかない。ラジオ局のコンピューターの故障，UCIMC における電話やインターネットなどの不具合，出演者が持ち込んだパソコンの不良，など，放送中でもトラブルは発生する。きちんと準備をしておけば回避できることもあれば，解決のためには専門的な知識，技術を要する問題や，WRFU や UCIMC の設備，構造上の問題など，個人では対処できない場合もある。

「インターネット配信のニュースを番組で紹介しコメントを加えてトークしていくはずが，放送中にネットに接続ができなくなってしまった」，「WRFU のスタジオの電話をとおしてトークをする予定が，電話が通じない」，「受話器からの話し声は聞こえてくるのに，その音声がラジオから流れない」など，放送中に，「テクニカルな問題」が発生するハプニングを何度も「見学」した。スタジオ内で生じていることは，ラジオでは映像としては届かない。リスナーには悟られないように，目と手で事態を把握し問題解決の手がかりを探りながら，口はマイクに向けて話し続ける。逆に，ユーモアを交えてトラブルを話題にして間を持たせる場合もあれば，「UCIMC はどこにあるのでしょう」，「私がラジオを始めたわけ」，など即座に体験談をまじえ，これまでとは別の話を展開したり，CD をかけたり，番組を急遽終了して，オートメーションの音楽に切り替える場合もある。状況にたいして「声」のみで臨機応変に対処し即興の演出ができることは，ラジオという媒体がもつ特性であろう。

WRFU のメーリングリストには，各番組担当者から，どんな問題が生じたのかが報告され，その対策についてのメールが行き交う。WRFU のメンバーが担当している番組は，それぞれ独立していて，別の番組の担当者同士が関係することは少ない。誰がどんな番組を制作しているのか，知らない場合が多い。その点では，共通の目的のもとで集いともに活動する UCIMC の他のプロジェクトと性格を異にする。トラブルについての情報を共有し，スキルや知恵をシェアしていくことで，同じスタジオを利用しているメンバーどうしが，メールで交信し，WRFU を１つのプロジェクトとしてつないでいる，という現状もある。

3-3 日本語番組制作の協力者と広報

日本語のラジオ番組制作の協力者，参加者をどうやって募るのか。番組を放送するためのスタジオの機材操作などの作業は，WRFU に2005年から関わっている Thomas Garza 氏（イラストレーター）に支援をお願いした。氏は，すでに２つの番組を担当しているので，

書類上では，番組責任者（host や co-host）として記載できない。番組を開始するためには，申請書類に代表者である host 以外に，少なくとも，もう１人 co-host が必要である。

米日をつないだコミュニティラジオ番組という企画を，最初に相談にのっていただいたのが，日本でフリーペーパーを発行している立石尚史氏（大学職員）である。立石氏のブログ「HOWE*GTR」には，DIY（Do It Yourself）を暮らしのなかでクリエイティブに実践していく様子が日々更新されている。UCIMC のメディア＆アート活動と共通する点も多く，立石氏を co-host に迎えて Harukana Show で話を聴いてみたい。そう考えて協力をお願いし，快諾をえた。host と co-host の２名がそろったところで，３月上旬に日本語の新番組の企画を WRFU に申請することができた。

そして，もう１人，日本からの co-host に加わっていただいたのは，神戸市の「ひがしなだコミュニティメディア」に関わる辻野理花氏（大学教員）である。阪神淡路大震災を経験し，多文化・多言語コミュニティ放送局，FM わぃわぃを取材した映像制作にも関わった。辻野氏から，コミュニティメディアやラジオについて，アドバイスをいただければと思い連絡をとった。2011年３月11日の震災のあと，「こんな時だからこそ，マイノリティの言語で放送できるコミュニティ FM のラジオ番組をイリノイでもつくってください。協力します」とメールをいただいた。

これから始まる未だ形のない番組について，具体的に説明することは難しい。この段階で Harukana Show を宣伝するには，趣旨を説明する言葉だけでなく，番組の「イメージ」があれば便利だと考えた。Garza 氏に，宣伝用のイラストをお願いした。ホストの私がスタジオのマイクに向かう，アニメ風のイラストが届いた。このイラストが，番組の雰囲気を先に作ってくれた。すぐに，フライヤー（図２）とポスター，そして番組の Website を作り始めた。英語と日本語による番組の趣旨説明，そして Podcast と Blog のページをつくった。３月中旬，とにかく，Harukana Show のサイトを開設することができた。

次に，イリノイ大学の EALC の教員にお願いして，日本文化関連の講義で，番組について説明する時間をいただいた。数百人が入る階段教室で，パソコンと接続したプロジェクターから Harukana Show のサイト画面をスクリーンに映し出した。教壇に立ち，こんなふうに話した。

「私は，神戸の甲南大学社会学科で文化人類学を教えています。イリノイ大学に在外研究に来て，この大学で日本語を学ぶ学生たちの日本への関心や話題が，甲南大学社会学科の学生たちの卒論テーマや興味と重なることに気づきました。海を隔てた遙か離れた場所にもかかわらず，音楽やコミック，小説，アニメ，ゲーム，映画などをとおして，何かが共有されていると感じます。Harukana Show では，Urbana の WRFU のラジオ局と日本とをつないでおしゃべりをしながら情報を交換し，日本の季節や暮らしの情景もお伝えしたいと考えています。JPOP も流していきます。ラジオから番組を聴いてください。Podcast を聞き直すと，日本語の日常会話の聞き取りの練習にもなります。どうぞ，スタジオに遊びに来てください。英語でも日本語でもいいので，番組にもぜひ，参加してください」。サイトとメールアドレスを記したフライヤーを教室の出入口においた。

ラジオ番組の宣伝は，イリノイ大学の学生と接するきっかけとなった。EALC では，月に何回か，Japanese Language Table という，日本語で会話する集ま

図２　Harukana Show フライヤー（2011年３月）

りを設けている。学部や学年，日本語習得のレベルと関係なく参加できる。見学させてもらうと，学生たちが，日本語で実に楽しそうに話していた。アニメや音楽，ファッション，小説，武道，茶道など，それぞれの学生が，日本の何かについて，語り尽くせない思いを寄せている。低迷する経済状況にも混沌とした政治状況にも，地震や原子力発電所事故といった災害のニュースにもかかわらず，そうした話題よりも，日本の文化（伝統的な文化やサブカルチャー）への憧れや好奇心をもっていた。子供の頃から「ポケモン」をみて，日本のサブカルチャーと身近かに接し，個々人がインターネットで世界から情報を得る世代にとっては，メディアが生み出すスペースにある種のリアリティが存在しているのではないかと思う。ラジオとインターネットを利用した異文化交流の試みは，「現実離れ」した話ではないのかもしれない。一部の学生は，興味を示した。

3-4 誰でもが参加できる，聞き流せる，暮らしのなかのラジオ

2011年４月１日金曜日，Harukana Show は，予期せぬ事態から始まった。スタジオのドアの鍵が開かない。UCIMC の関係者や管理会社に電話やメールで問い合わせドアが開いたのは６時15分，放送開始の予定時刻を，すでに15分過ぎていた。この事態にどう対処していいのかと考える間もなく，機材担当の Garza 氏が，素早くセッティングを始める。日本との時差は，サマータイムは14時間，土曜日午前８時前からパソコンの前で放送開始と出演を待っている立石氏と辻野氏に，メールで状況を短く説明する。持ち込みのパソコンと iPad とマイクをミキサーにつなぐ。音合わせ，打ち合わせもなく，５分後には放送を開始した。

この日は，飛び入りのゲストを２人迎えた。イリノイ大学での宣伝をとおして番組の始まりを知り，WRFU のラジオ局に見学に来てくれた学生だった。２人は，スタジオに入ってからも終始楽しそうである。「番組のなかで日本語で話してみますか？」と尋ねると，迷いなく，「はい！」との返事である。日本に関心をもったきっかけは，子供の頃，友達にすすめられて見たアニメ「NARUTO」，好きな小説は「Murakami Haruki」。若い２人のゲストが，ぶっつけ本番でマイクに向かって日本語で話す様子にスタジオが活気づく。スカイプをとおしての日本からの出演となる立石氏と辻野氏とのトークも滞りなく，Garza 氏の手際よいサポートのおかげで，終了時刻を20分遅らせて，番組を１時間できちんと終えることができた。

第１回の放送では，番組のスタッフ４名の紹介と，Harukana Show の趣旨を語った。Podcast No. 1-1 には，「Harukana Show 宣言」としてこんな文章を添えた。「誰でもが始めることができる，参加できる，聞き流せる，いろいろな言語の放送が，普段の暮らしのなかでラジオから流れている，それが Harukana Show の夢です」。

放送が終わり，初回からのトラブルに落胆しているところに，１通のメールが届いた。「ハルカなショーを聴きました。来週，スタジオに見学にいってもいいですか」，といった内容だった。イリノイ大学日本人会のメーリングリストに送信した宣伝を読み，番組を聴き，終了直後に，Harukana Show 宛に送られてきたメールであった。少なくとも一人のリスナーが存在すること，電波が本当にスタジオと人とをつなぐことを知った。

4　多文化が接触するメディア・スペース

4-1 多様性の尊重と「つまづき」の共有

アメリカのコミュニティラジオでの日本語番組を始めるまでの経緯をたどってきたが，コミュニティメディアを，新しい参加者が利用することの難しさと可能性を最後にまとめたい。在米外国人である「私」が，WRFU において番組を開始するうえで，最初に壁と感じたのは，これまで述べてきたように，UCIMC や WRFU において，「コミュニティ」とは何かという問題とコミュニケーションの問題である。

コミュニティラジオが，地域社会の活性化や，そこでの何らかのコミュニティへの帰属意識や関わりがある人々や，目的を共有するグループやエスニック・グループのためだけのメディアであるなら，地域に拠りどころがないと感じる人々や流動的な住民にとっては，利用しにくい場合がある。しかし，UCIMC や WRFU が，自らをコミュニティメディアと称する場合，地域に特化したメディアというよりも，地域に拠点があることを活かし，近隣住民が利用しやすい，参加しやすいことに重点をおいている。UCIMC が，メディアをより多くの人々に開いていこうとする組織，活動であるがゆえに，地域において一時滞在の外国人である私が，WRFU で日本語放送を始めることができた。

しかしながら，一方では，UCIMC の実際の利用者は，広く一般住民というよりも，メディアやアートに関心をもち，表現や発信という行為に意識的に取り組

む一定層に偏る傾向もある。とくに WRFU の番組制作に携わる人々は，自分たちの活動や関心を，ラジオをとおして伝えたいというヴィジョンと企画と熱意をもっている。各番組の制作スタイルや内容は，それぞれのショーの担当者に任され，WRFU が干渉することはない。

主体性や独自性の尊重は，多様性を育てることにもなるが，その一方で，初心者にとっては，コミュニティラジオへ関わることを時には難しくしている。ラジオ番組の制作に携わってみたくても，ラジオ番組をどのように作っていけばよいのか，実践へのステップは，各自が工夫していかなければならない。番組制作の経験がなく，その社会の常識やラジオや各種メディアの特性に不慣れな場合，いっそうに不安をいだく。

UCIMC や WRFU は利用者にたいして，特定の方針や方法を強く打ち出すのではなく，各自の要望があれば柔軟に対応していく。技術や方法について疑問があれば，協力を求めれば，WRFU のメンバーは，快く，一緒に考え，サポートしてくれる。依頼があれば，一人のためにでも講習会を開く。希望すれば，WRFU の番組を見学し，制作のコツやアドバイスを受けることもできる。実際に，誰にでも扉は開いているのだが，疑問を伝え協力を求めることも，組織に馴染みのない者には容易ではない。また，想定外のさまざまな事態に臨機応変に対処し，必要な場合 UCIMC の他のワーキンググループのメンバーとも連携して問題を解決していくには，そこでもまたコミュニケーション能力が不可欠となる。

ところが，UCIMC のような大きな組織となると，どのような事態に，誰にどんな協力を求めていいのか，分かりにくい。とくに WRFU は，各番組が独立していて，プロジェクトの全体像がとらえにくい。メーリングリストは，手続きさえとれば誰でもすぐに利用でき，毎日，メールでの情報，意見が飛び交う。しかし，疑問や問題をその時々に言葉にして即座に伝えることができなければ，利用しにくい。また，そこに記された名前の人物と直接に会う機会は少ない。顔が見える関係のなかで相談することができれば，新しい参加者にとって，とくに，異なる言語を用いる者には心強い。だが，専従スタッフがいない小さなラジオ局においては，そうした体制を整える余力はない。

また，学習法の違いも，一部の初心者にとって WRFU でラジオ番組を始めにくい一因となる。まずは基本を習得し，そこから段階をふんで上級編，応用編へと進む学習法に馴染んできた者には，WRFU でのラジオ番組制作は，いきなり応用編から入り経験をとおして基本を見いだすという，逆の流れであり，それを困難だと感じることもある。私も，いくら集会に参加し WRFU に関わろうとしても，番組制作の基本さえ分からない，番組を担当することはとても無理だ，と思っていた。

しかし，順序は逆で，番組作りをしたいという意思を表明し，実際に取りかかることで，ようやく周囲の人々との関わりが生まれ，そこで起きるトラブルをとおして何が問題，障壁なのかを具体的に知ることができる。「失敗」や「つまづき」は，人とともに問題を考えるコミュニケーションのチャンスであり学習のプロセスである。それが，マニュアルに依存せずに，多様性を尊重した番組制作への取り組み方であることは，体験を振り返ってみてようやく実感する。それでも初心者にとってもう少し利用しやすくするには，一人一人のスタンスや独創性を尊重しながらも，番組作りの趣旨，制作方法，トラブルを含む参加者それぞれの経験を伝える機会をつくり，そこでの情報交換や知恵を記録し随時に引き出せる仕組みをつくっていくことも大事なのではないかと思う。

4-2 コミュニティラジオが生み出す異文化接触のリアリティ

2011年４月１日から始まった Harukana Show は，2012年１月13日現在までに，42回の放送を重ねた（論文末表１　Harukana Show Podcast No. 1-42 タイトルと出演者）。ゆっくりではあるが，ラジオをとおしたつながりが生まれていった。番組のスタッフは，最初は，U-C からは Mugiko（西川麦子）と Tom（Thomas Garza），日本からは Tateishi（立石尚史）と Tsujino（辻野理花）の４人であったが，９月からは，新たに，Tamaki（Levy・野田・環，イリノイ大学臨時職員）と Ryuta（小牧龍太，イリノイ大学大学院生）が co-host に加わった。Levy 氏，小牧氏という U-C 在住のスタッフが２名増えたことによって，地元の情報が豊富となりゲストを迎えやすくなった。私は，在外研究を終えて2011年９月に帰国し，その後も，日本から番組の企画，構成，進行に携わっている（写真６，７）。

Harukana Show では，スタッフの誰かが，その回の主な話題を提供するか，ゲストを迎える。日本のスタッフからは，その時々の季節の話題や，DIY や Zine，コミュニティメディア，震災に関して，イリノイのスタッフからは，U-C のイベント情報，イリノイの季節，食，行事，大学生活などに関するトークが中

写真６　Harukana Show 放送中　2011年

写真７　Harukana Show 放送中（2012年１月13日）
スカイプ画面
左：Mugiko（京都）　中央：Tsujino（神戸）
右：Ryuta（WRFU, Urbana）

心である。

また，42回の放送に，20名をこすゲストが，スタジオに直接，あるいはスカイプをとおして番組に出演し，日本語か英語でトークを繰り広げた。番組スタッフが，各自の活動の関係者に出演を依頼することもあれば，リスナーがスタジオを見学にくるという場合もある。イリノイ大学には，アジア関係を扱う学部，図書館，教育，研究センター，日本館，日本文化関係のサークル，イリノイ大学日本人会などがある。これらの機関や関係者からイベント情報などを知らせてもらったり，時には番組への出演をお願いした[18]。

イリノイからのゲストは，イリノイ大学学生，卒業者，教職員，UCIMC のプロジェクトの関係者，日本での英語教師経験者，などである。トークの内容は，UCIMC で開催されるイベントや，日本でのホームステー，留学，就職経験から，アメリカでの就職活動，茶道などの趣味，シャンペーンの映画館でビールを飲みポップコーンをほおばり日本の時代劇フィルムを観る楽しみなど，日々の暮らしや日本への関心，経験談である。イリノイ大学の学生は，それぞれの専門や日本語習得レベルに関わらず，日本語を話し会話を楽しむ。ある工学部の学生は，最初は，Harukana Show へ音楽をリクエストし，次にスタジオを見学にきた。その後，大学が夏休みの３ヶ月間，毎週，スタジオに来て「Alex さんの JPOP コーナー」を担当し，日本語で軽快なトークを披露し音楽を紹介した。

日本からのゲストは，学生，大学教職員，コミュニティメディア活動に携わる人々，アーティストなどである。辻野氏が担当する講義の受講生たちから，サウンドメッセージ（日本を紹介する数10秒から数分の録音と，それに添えた説明文など）が届いた。また，津田塾大学の学生たちが，関西でのフィールドワークを行っているあいだに，スカイプをとおして Harukana Show に出演し，調査の様子を伝えてくれた。

番組をとおして人や組織と接する機会は増えるが，番組スタッフ，ゲスト，リスナーが有機的につながるわけではない。放送を聴いている人は，実際には数えるほどかもしれない。それでも，WRFU のスタジオという物理的な場所と電波とインターネットが組み合わさって，メディアが生み出したスペースが確かに存在している。

メディアがさまざまな場所や社会をつなぐとき，身近な暮らしを改めて見直し，同時にそこにはいない他者の存在を意識し始める。番組の関係者は，制作に関わるようになって，今まで気づかなかった日常や社会を改めて見直し情報を集めるようになる。出演者やリスナーがそれぞれに，アメリカや日本についてのイメージをもっているからこそ，想像力が働き対話や理解が成り立つが，そこには無数の思い込みや誤解，解釈のずれもある。出演者どうしがトークのなかで「そうだったんだ」と，小さな発見を重ね，その新鮮な驚きは，リスナーへも伝わる。それは日米の違いとは限らず，出演者一人一人の個性や，場所，状況，世代などの違いによる場合もある。季節や日常生活を伝えることは容易ではないが，逆に，離れた場所で，物や文化や情報がグローバルに共有されていることにも気づく。

ラジオとインターネットを用いて，異なる時間，場所，人をつなぐ試みは，異文化交流というには大げさであるが，そこには，ある種の「接触」[19] の体感，息づかい，手触りがある。それは，声を届けるラジオという媒体が生み出すリアリティである。これまで出演者は，日米とも大学関係者が多いが，とくに学生にとっては，米日をつないだラジオ・スペースへの参加は，自分の語学力を実践のなかで試し，生きた会話を楽しみ，日本やアメリカと触れる刺激にもなっている。そこでの臨場感を生み出しているのは，昼夜が逆転した時差にもかかわらず，毎週，スタッフがスタジオに

（スカイプで）集い，ゲストがやってきて会話を交わし，ラジオやインターネットをとおして誰かがそれを聴く，という営みがあるからだ。こうしたメディアが生み出す異文化接触のスペースやそこから生まれる関係，ネットワークの可能性，番組制作の具体的な方法，UCIMC や WRFU の組織運営などについては，改めて論じていきたい。

注

1）筆者は，勤務校である甲南大学から在外研究の機会をえて，アメリカ合衆国において実践的な研究を行うことができた。甲南大学，文学部，国際交流センター，そして受け入れ先であるイリノイ大学 Department of East Asian Language and Culture（EALC）とその関係者に深く感謝している。

2）地域に基盤をもつコミュニティメディアや市民メディア，ソーシャルメディア，パブリック・アクセスの現状については，ダン・ギルモア 2011［2010］，金山智子編著 2007，金山勉・津田正夫編著 2010，紺野望 2010，松本泰幸 2009，松浦さと子・川島隆編著 2010，松浦さと子・小山帥人編著 2010，田村紀雄・白水繁彦編著 2007，津田正夫・平塚千尋編著 2006，などを参照。

UCIMC や WRFU の活動は，Community Media, Community Radio と称しているが，地域社会に密着したメディアというよりは，中央の権力やマスメディアにたいして，それらからは独立したメディアであることが強調されている。その点では，オルタナティブ・メディアと表する方が分かりやすい。ここでのオルタナティブとは，多様性を尊重すると同時に，マスメディアや一方的な権力の行使にたいする批判的な視点を含む。ただ，UCIMC は，ひとつの統制された組織や活動体というよりも，さまざまな活動，思想をもつ人々の集まりである。オルタナティブ・メディアについては，Coyer, Dowmunt & Fountain 2007，ミッチ・ウォルツ 2008［2005］，参照。

3）人口統計は，U. S. Census Bureau website 内 Urbana（city）, Illinois，同 website 内 Champaign（city）, Illinois 参照。

4）Champaign County website 参照。同サイトによると，Champaign County の面積は1008平方マイル，その多くは農地である。U-C も，キャンパスとダウンタウンを通り過ぎると周囲は一面コーン畑となる。大学から６マイルほど南下したところに Willard University Airport がある。イリノイ州最大の都市シカゴまでは，Urbana 中心地から北に約139マイルである。

5）2011年 Fall の統計では，イリノイ大学 U-C 校の在校生は，下記のとおりである。42,605 total students: 31,932 undergraduate and 10,673 graduate and professional students, 54% men, 46% women, 5.0% African-American, 6.0% Latino/a, 11.0% Asian-American, 0.13% Native American, 2% Multiracial and 19% International.（イリノイ大学 website 内 FACTS 2010-11: ILLINOIS BY THE NUMBERS）留学生の上位５カ国は，China（3,086），South Korea（1,536），India（876），Taiwan（438）, and tied for 5th place are Canada（123）and Indonesia（123）となっている。なお，日本人学生の登録者は，学部，院生を合わせて75人，スタッフや研究者は45人，合計しても120人である。（同サイト内 FALL 2011 INTERNATIONAL STATISTICS）

6）2009年には11名の AmeriCorps のメンバーが UCIMC に派遣されていた（UCIMC website 内 UC-IMC Highlight）。2011年には，その数は半減している。

7）「シアトル IMC は，ペーパータイガー TV などの従来から活動する複数のビデオアクティヴィズム・グループの協力を得た。そこでは会議中の IMC の日々の運営を行うために８人のボランティアが働いていたが，さらに数百人がセンター設立を支援し，機材を提供し，そしてさまざまな形で現地レポートを提供した。」（ウォルツ 2008：232）

8）Indymedia と UCIMC との関係については UCIMC website 内，About us, Global Indymedia を参照。なお，2012年１月現在 Indymedia Network website に掲載されている世界の IMC 数は，Africa 6, Canada 12, East Asia 5, Europe 58, Latin America 18, Oceania 13, South Asia 2, United States 56, West Asia 4, である。

9）2011年12月31日現在，FCC による統計では，放送を行っているラジオ局は，全米において，AM Stations: 4766, FM Commercial: 6542, FM Educational: 3644, Total: 14,952, 統計ではこれらとは異なる分類として，Low Power FM: 838, となっている。（2012年１月６日付け，FCC website 内：Broadcast Station Totals（Index）1990 to Present）。

なお，「アメリカでは2010年12月18日に成立した『コミュニティラジオ法』によって新たに出力100ワットの『ローパワーコミュニティラジオ』が大都市に大量に出現すること」（隅井 2011：34）が予想される。Local Community Radio Act の詳細は，Chynoweth 2011, Prometheus Radio Project の website を参照。また，2011年に FCC から communities にとっての，hyperlocal なメディアや情報の重要性を強調する464頁にわたる報告書が発行されている。Waldman 2011 を参照。

10）Prometheus Radio Project は，1998年に米国フィラデルフィアで設立された NPO, Local Community Radio の普及を支援，全米の Low Power Community Radio のネットワークを展開，技術と労力を提供し３日間で各地のラジオ局建設を支援する Radio Barnraisings は，2002年から2010年にかけて全米に12のコミュニティラジオ局をつくった（Prometheus Radio Project website 内 Barnraising）。2005年11月11日から13日には Radio Free Urbana のラジオ局作りを支援した（Dougherty 2005）。

11）より広域に電波を届けるために，WRFU の送信アンテナを65フィートから100フィートに建て替える申請が，2011年３月には，Urbana のタウンホールの議

会で可決された。（Safronova 2011, April）その後，2012年１月現在においては，送信アンテナの建て替えの実施には至っていない。

12）WRFU 開局の経緯は，UCIMC のワーキンググループが発行する新聞 *Pulic i* の掲載記事に詳しい。Dougherty 2005, Edwards 2005, Lemon 2005, Melchi 2005, Urban 2005。

13）Urbana-Champaign には11の商業ラジオ，Public Radio, College Radio のラジオ局がある。また，市外のラジオ局からの電波も届くので，さらに多くの FM, AM を聴くことができる。On the Radio Net の website 参照

14）Airshifcer Hand Book は，UCIMC website 内 WRFU の頁に PDF がアップロードされており，誰でもダウンロードできる。

15）クリスティーナは，AmeriCorp から派遣され年契約で UCIMC の活動に関わっていた。

16）“We are part of a global network of collectively-run media outlets for the creation of radical, accurate, and passionate truth-telling. We are a grassroots organization committed to using media to promote social and economic justice in the Urbana-Champaign area and beyond. At our core, we aim to empower people to *become the media* by providing democratic access to available technologies and information.”（UCIMC からのＥメール本文抜粋，2011年10月）

17）Dorothy 2004，参照

18）次の学部，組織の関係者の方々からは，イベントなどの情報提供やラジオ番組に出演というかたちで，ご協力をいただいた。Dept. of East Asian Language and Culture, International & Areas Studies Library, Center for East Asian Pacific Studies（CEAPS）, Asian Educational Media Services, Asian American Cultural Center, Japan House, Illinis Japanese Association, Japan Intercultural Network。また，Cornell University の Department of Asian Studies と CEAPS では，「Radio Space to Link among “Communities” and “Nations”: A Japanese Radio Show in a Community FM, IL, US」というタイトルで，それぞれ2011年５月２日，９月６日に発表し，参加者と意見を交わす貴重な機会をえた。

19）金山智子［2007：193］は，神戸市長田区の FM わぃわぃの日比野氏の話を引用して次のように述べている。「まず，何かで『接触』する機会があって初めて『理解』が生まれ，『共感』へとつながっていく。そういった意味において FM コミュニティ局は地域のメンバー間の接触を促す媒体となっているといえよう。そして，この『接触』は『知る』という行為だけでなく，参加したという『共通の経験』によって内部的な交流の触媒として機能を果たすのである」。

　金山がここに記している，接触，共感は，地域やコミュニティ FM ラジオという現場があるからこそ生まれるが，そこでの共通の経験は，地域内の交流だけでなく特定の場所をこえた場所や人々との関係を生み出し，相手を知り，私を伝えようとする想像力を活性化するのではないかと，Harukana Show の番組づくりをとおして考えている。

参考文献・資料

文献

Dorothy, Kidd

・2004, “The IMC: A New Model”, *The IMC: A New Model, Don’t Hate The Media, Be The Media,* pp. 9-16, http://www.hedonistpress.com/indymedia/

Coyer, Kate & Tony Dowmunt and Alan Fountain,

・2007, *The Alternative Media Handbook,* Routledge

ダン・ギルモア著，平和博訳

・2011（2010）『あなたがメディア！――ソーシャル新時代の情報術』朝日新聞出版

金山智子編著

・2007『コミュニティ・メディア――コミュニティ FM が地域をつなぐ』慶応義塾出版会

金山勉・津田正夫

・2011『ネット時代のパブリック・アクセス』世界思想社

紺野望

・2010『コミュニティ FM 進化論――地域活力・地域防災の新たな担い手』ショパン

ヒルズ水島

・2007『キミにもできるコミュニティ FM』CQ 出版社

松本泰幸

・2009『市民メディアの挑戦』リベルタ出版

松浦さと子・川島隆編著

・2010『コミュニティメディアの未来――新しい声を伝える経路――』晃洋書房

松浦さと子・小山帥人編著

・2008『非営利放送とは何か――市民が創るメディア』ミネルヴァ書房

西川麦子

・2004「ロンドン，ハマースミスにおける1970年代のコミュニティ開発の実験的試み」『甲南大学紀要文学編131社会科学特集』79～108頁

・2007「ロンドン，ノッティングヒルにおける1960年代初めのコミュニティ活動の試み――あるメソジスト教会牧師とニュー･レフト活動家の取り組み」『甲南大学紀要文学編146社会科学特集』39～67頁

・2009「ロンドン，ハマースミスにおける住民の活動の場としての「地域」の創出――情報のネットワークと個人の選択を基盤としたレジデンツ・アソシエーション」『甲南大学紀要文学編156』145～176頁

・2010『フィールドワーク探求術――気づきのプロセス，伝えるチカラ』ミネルヴァ書房

隅井孝雄

・2011「町衆の手作りメディア――京都のコミュニティ FM ラジオ」金山・津田 2011，19～35頁

田村紀雄・白水繁彦編著

・2007『現代地域メディア論』日本評論社

津田正夫

・2011「パブリック・アクセスの歴史と現在」「転換期

のパブリック・アクセス――アメリカ」金山・津田編 2011，70～84頁
津田正夫・平塚千尋編著
・2006『新版パブリック・アクセスを学ぶ人のために』世界思想社
ミッチ・ウォルツ著，神保哲生訳・解説
・2008『オルタナティブ・メディア――変革のための市民メディア入門』大月書店
Waldman, Steven and the Working Group on Information Needs of Communities
・2011, "THE INFORMATION NEEDS OF COMMUNITIES: The changing media landscape in a broadband age", Federal Communications Commission, www.fcc.gov/infoneedsreport
WRFU-LP 104.5FM,
・2009, "Airshifter Handbook," http://www.wrfu.net/sites/wrfu.net/files/WRFU_AirshifterHandbook_June2009_2.pdf

新聞 *Public i,* UCIMC
Chynoweth, Danielle
・" Make More Local Radio!" November 2009, p. 3
・"Thousands of New Community Radio Stations on the Horizon with the Historic Passage of the Local Community Radio Act", December 2010-January 2011, p. 1
Dougherty, John with photos by Edward, Wendy
・"Prometheus Project Helps Launch Radio Free Urbana", December-January 2005, p. 4
Johson, David
・"The Legency of The 1999 WTO Battle Of Seatele On Champaigh-Urbana", November 2009, p. 1
Lehman, Mike
・"WRFU: We R For You" May 2004, p.1
・"IMC Moves Into the Community Media Arts Center", July-August 2005, p. 4
McCann, Austin
・"Ten Years at the U-C IMC," October 2010, p. 4
Melchi, Lynsee
・"Low Power for the People!" November 2005, p. 1
Illyes, Bob
・"UCIMC Renovation is Underway" November 2005, p. 1
Riismandel, Paul
・"Thank the Pirates for Radio Free Urbana" May 2004, p. 1
Urban, Ken
・"Something on the Air" December-January 2005, p. 5
Safronova, Tatyana
・"Bigger is Better! Help WRFU Erect Epic Radio Tower" February 2011, p. 1
・"WRFU Tower is Approved" April 2011, p. 1
Stengrim, Laura
・"The Challenges of Media Reform" June 2005, p. 2

参考 URL（最終アクセス2012年１月19日）
Champaign County, Illinois: http://www.co.champaign.il.us/
Harukana Show: http://web.me.com/haruwa/
Independent Media Center: http://www.indymedia.org/
MEDIA　ROCCO ひがしなだコミュニティメディア：http://mediarocco.jp/
HOWE*GTR: http://howe-gtr.air-nifty.com/tamakichi/
On the Radio. Net: http://www.ontheradio.net/
Prometheus Radio Project: http://prometheusradio.org/
United State Census Bureau: http://www.census.gov/
Urbana Champaign Independent Media Center: http://www.ucimc.org/
University of Illinois, Urbana Champaign, Fall 2011 International Statistics: http://isss.illinois.edu/form_downloads/Fall_2011_Stats.pdf
WEFT: http://weft.org/

表１　Harukana Show Podcast No. 1-42（2011年４月１日～2012年１月13日）タイトルと出演者

表内記号：＊(Guest), UI (University of Illinois), AACC (Asian American Culture Center)
KU（甲南大学), IC（津田塾大学), IJA (Illini Japanese Association), JH (Japan House)
番組進行：Mugiko（西川，No. 1-25，WRFU スタジオから，No. 26―日本から），機材担当：Tom (Garza)
co-host：Tateishi（立石), Tsujino（辻野), Tamaki（Levy), Ryuta（小牧）

No	年/月/日	Podcast No	Podcast タイトル	出演者 US / WRFU Studio	出演者 Japan / Skype
1	110401	1-1	Harukana Show 宣言	Mugiko	
		1-2	Harukana Show スタッフ紹介	*Akiko & Hallmark (UI)	立石，辻野
2	114008	2-1	サクラとモクレンと Speak Café	Mugiko	
		2-2	ラジオ番組制作，“平常”を伝えるメディア	*井上 (UI, IJA)	辻野
3	110415	3-1	The Bike Project～自転車と人の輪	Mugiko	
		3-2	Urbana-Champaign Mini Maker Faire～DIY の精神		立石
4	110422	4-1	アメリカの Zines とは？（英語）	*Chris (IMC)	
		4-2	被災地との地域連携		*高木 (KU)
5	110429	5-1	東日本大震災と49日法要，Asian American & Pacific Islander Heritage Month（英語）	*May (AACC)	
		5-2	Tateishi さんの Zine Culture との出会い		立石
6	110506	6-1	ハナミズキ（Dogwood）と日米	Mugiko	
		6-2	首都圏の大学の新学期，東灘だんじり		辻野
7	110513	7-1	「山笑う」，“Mother's Day”	Mugiko	
		7-2	Tateishi さんの Zine Culture との出会い(2)，Share the Resource		立石
8	110520	8-1	JET（Japan Exchange and Teaching), Program	Mugiko	
		8-2	Tatyana さんの日本体験～アメリカと同じ？だけど違う（英語）	＊Tatyana (IMC)	
		8-3	Message from Tatyana（英語）	＊Tatyana (IMC)	
9	110527	9-1	Alex さんの JPOP との出会い	＊Alex (UI)	
		9-2	日本への留学予定の Caroline さんの関心，日本のコミュニティラジオと多言語放送，災害	＊Caroline (UI)	辻野
		9-3	ラジオ・スペースと「もっきりや」さん	Mugiko	
10	110603	10-1	アメリカは夏の気分（？）&日本は衣替えの季節	Mugiko	
		10-2	Alex さんと JPOP	*Alex (UI)	
		10-3	Creative Reuse	Garza	立石
11	110610	11-1	ホタル&「ひぐらしのなく頃に」から	*Alex (UI)	
		11-2	東日本大震災３ヶ月&コミュニティラジオと地域		辻野
12	110617	12-1	臨時災害ラジオ，FM あおぞら	Mugiko	
		12-2	AKB48 with Alex	Alex	
		12-3	大阪市水道水「ほんまや」		＊乾 (KU)
13	110624	13-1	山崎ハコ，SKE48 with Alex	*Alex(UI)	
		13-2	コミュニティ FM の大切な仕事／FM あおぞら	Garza	
14	110701	14-1	だんご虫（poll-but）とカボチャ	*Alex(UI)	
		14-2	コミュニケーション・ツールとしての Zine		立石
15	110708	15-1	西洋菩提樹，インターシップの季節	*Alex (UI)	
		15-2	梅雨明けの関西，節電～大学での取り組み		*乾 (KU)
16	110715	16	音楽な夕べ～ロンドンから？	Mugiko	
17	110722	17-1	Sound Message「鹿威し」by 遠藤，Alex さんの1990s	*Alex (UI)	
		17-2	メディア・フィールドワーク with Tsujino		辻野
18	110729	18-1	Sound Message「コンビニエンスストア」by 糸原，NMB48 by Alex	*Alex(UI)	
		18-2	なでしこ Japan &タテイシさんの夏の課題		立石
19	110805	19-1	津田塾大学メディア・フィールドワーク実習の皆さん		津田塾大学８名
		19-2	旅したい Alex	*Alex (UI)	
20	110812	20-1	Harukana Show 20回記念	*Alex (UI)	
		20-2	A Year in Japan（YIJ）の始まり，with Prof. David Plath（英語）	*Plath (UI)	辻野，*森田 (KU)
21	110819	21-1	Alex & Ayaka の日米 AKBE48 談，のはずが…	*Alex (UI)	*Ayaka (TU)
		21-2	つながる場としてのメディア		辻野

No	年/月/日	Podcast No	Podcast タイトル	出演者 US / WRFU Studio	出演者 Japan / Skype
22	110826	22-1	にぎやかに Open Day，Alex & Ayaka トーク	*小野坂(UI)，*Levy (JH)，*Alex (UI)	Ayaka/(TU)
		22-2	タテイシさんの夏の作品，DIYT RIP SIATTLE & PORTLAND		立石/京都
23	110902	23-1	Sound Message「やっぱりお風呂（？）」by 西，Happy な時間	Levy，*Alex (UI)	
		23-2	ひがしなだコミュニティメディア with Takaki & Akazawa		*高木 (KU)，*赤澤
24	110909	24-1	技術的に変わったが……With Ryuta	*小牧 (UI)	
		24-2	Japanease Conversation Table with Alex	*Alex (UI)	
		24-3	Harukana Show からのお知らせ，地域の情報をグローバルに発信する		辻野
25	110916	25-1	感謝をこめて & Alex	*Alex (UI)	
		25-2	思い出して笑ってしまうこと，アメリカご飯	Levy	
26	110923	26-1	子供たちだけでは外出しない？ With Sound Message「夕方の公園から流れる曲」by 新行内	Levy＆小牧	
		26-2	りんご，りんご，りんご＆ピーチ		Mugiko
27	110930	27-1	りんごの思いで，Home Coming とビールの季節	Levy＆小牧	
		27-2	手作り――自分の手で届く範囲		立石
28	111007	28-1	キンモクセイのかおり＆ U-C のイベント情報	小牧＆Levy	
		28-2	時代劇とポップコーン with Mike さん	*Mike (UI)， Levy ＆小牧	
29	111014	29-1	秋の運動会，Mugiko, Tamaki，Ryuta, Tom のトークリレー	小牧＆Levy＆Garza	
			Ryutaさんのふらり JPOP コーナー，UCIM の Tower Project	小牧，Garza	
		29-2	深江多文化こども祭りを iPhone で生中継		辻野
30	111021	30-1	今週は時代まつり（京都），日本語を実践的に学ぶ，イリノイ大学もシューカツの季節？	*小野坂 (UI)	
		30-2	秋の夜長に，シカゴレポート	小牧＆Levy	
31	111028	31-1	シューカツのマナー講座 from Kobe, ハロウィンの怪談	小牧	
		31-2	ハロウィン！かぼちゃ提灯とパンプキンパイ作り	Levy＆小牧	
32	111104	32-1	Alex さんからのメール，Japan House の Open House	Levy	
		32-2	Ryuta さんのゆらり JPOP 京都編～つじあやの	小牧	
33	111111	33-1	神戸東灘区にハロウィンの行列!		辻野
		33-2	ウクレレ仲間と Jake Shimabukuro な話	Levy＆小牧＆Brian	
34	111118	34-1	サンクス・ギビングの帰省		Mugiko
		34-2	アメリカでの就職活動	Levy＆ *Makiko	
35	111125	35-1	感謝祭の大きなターキーをおいしく食べる方法	Levy＆小牧	
		35-2	Tateishi & Tsujino 初顔合わせトーク～メディアをクリエイティブに DIY する		立石＆辻野
36	111202	36-1	日本では大学生は就活スタート，U-C はクリスマス前に学期末試験	Levy＆小牧	
		36-2	コミュニティメディア年末総集編トーク（前）From Kyoto		立石＆辻野＆*清水
		36-3	コミュニティメディア年末総集編トーク（後）from Kyoto		立石＆辻野＆＊清水
37	111209	37-1	「けいおん！」＆「Ben E. King」		Mugiko
		37-2	Wings f Defeat @ Urbana Free Library	小牧＆Levy	
38	111216	38-1	日本の Zines は，お部屋に馴染む？クリスマス前の浅漬けの話	Levy＆小牧	
		38-2	８歳で日本を夢見た Brian さんの茶道と温泉のお話	Levy＆*Brian (UI)	
39	111223	39	ひっそり静かな U-C にたっぷり素敵な曲 with Ryuta	小牧	
40	111230	40	今年最後の Harukana Show は，40回め！年末年始はどうしてますか？	小牧	
41	120106	41-1	日本全国を旅するピアノマン，RIKUO の新春インタビュー（前半）		＊RIKUO
		41-2	日本全国を旅するピアノマン，RIKUO の新春インタビュー（後半）		＊RIKUO
42	120113	42-1	南仏 Albi のロト一等賞の景品とは？ Email from Inui		Mugiko
		42-2	「つなみラインウォーク」への取り組み by 神戸，ひがしなだコミュニティメディア		辻野